

# 城山山麓の墓所 (五)

先人の跡をしのぶ

山本

保

(会員・佐伯市池舟)

## 一 陸軍墓地

日豊本線踏切を越えた臼坪区岡の谷に、陸軍墓地がある。その入口には、標識板が立てられている。

佐伯招魂所

この陸軍墓地は、明治十年西南の戦乱に際し、豊日国境地帯梓峠、陸地峠、黒土峠、津島畑、松尾山、三河内、蛇葛山などで、戦死又は傷ついて病死した軍人・軍夫百三十四柱、警察官十四柱を祀り、百四十八柱の墓碑があります。

境内上には「敵愾」の碑、一段下って、左側に「東京警視萩原隊戦死之碑」があり、明治十一年九月埋葬建立されたもの。昭和五十六年十月八日 佐伯ライオンズクラブ

薩摩は、昔から尚武の国で、剣術が盛んであった。薩軍の得意とする白兵戦に備えて、官軍は剣道錬達の士族を募集し、警視隊を編成したが、東京警視萩原隊はその一つであり、山岳戦において勝利を納めた。

### 1 東京警視萩原隊戦死之碑

警察官墓地には、警部補心得・高島謙次郎外十三柱の墓碑が建立され、その裏面及び左右両側に戦死場所、年月日、部隊名、出身町村名が彫り込まれている。

また、正面には、中村正直（文学博士・貴族院議員）撰と大庭永成書による「東京警視萩原隊戦死之碑」―明治十一年十月三日―が立っている。

碑文には、大分と宮崎の県境で、五十三名の死者と、百二十一名の負傷者が続出したこと、「戦陣之勝、雖由干将校之良、亦士卒効死之功」などが記入されている。毎年、盆やお彼岸の中日に、佐伯警察署員は、落ち葉の清掃や草取りをしたあと、水と花を供えて、故人のめい福を祈るならわしになっている。



招魂所 (一部)

なお、大分市松栄山・護国神社には、藤丸警部墓、中村正直、毛利空桑撰碑とともに、警察官百五柱、また同所の陸軍墓地に二百二十一柱、合わせて三百二十六柱の英霊が、静かに眠って

いる。その中には、床木村(弥生町)出身で、明治十年五月三十一日大野郡三重町で、戦死した陸軍兵卒高司幸太郎之墓がある。彼は熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊に所属していた。

## 2 敵愾の碑

軍人墓地には、陸軍大尉・高田吉岳警備隊司令ほか、百三十四柱の、大小さまざまな墓碑が林立している。奥まった、一段と高い位置に、大きな楠がうっそうと茂っていて、非常に閑静な場所である。

陸軍大将・一品大勲位・有栖川宮熾仁親王たると題額の「敵愾」と、正六位勲四等・秋月新太郎撰並びに書による、大きな記念碑―明治十九年五月―が建立されている。

この戦いには、熊本鎮台(熊本城)応援のため、仙台を始め、東京・名古屋・大阪・広島など、全鎮台(のちに師団と改称)が総力を結集して、薩軍に対抗した。その征討総督は、有栖川宮熾仁親王であった。

### (イ) 佐伯地方

明治十年五月二十五日午後二時、薩軍三百余名が、佐

伯へ侵入した。一隊は城北中野谷を越えて馬場先口（養賢寺）へ、二隊は西樹形を経て、角石（西谷）へ、三隊は堅田村久部から番匠川を渡船し、警察署、裁判所、学校などに乱入して、建物を破壊した。

五月二十六日午前十時、海軍の浅間艦は佐伯湾石間沖より、砲門を開いて攻撃を開始し、午後二時まで、砲声は鳴り響いた。そのため薩軍は、切畑村へ退去した。

五月三十一日、再び薩軍四百余名は佐伯を来襲した。

六月一日軍艦は石間沖より、午前六時より午後四時まで、八時間にわたり、艦砲射撃を行ったので、薩軍は切畑村へしりぞいた。

六月六日薩軍はみたび佐伯へ進軍した。本部を船頭町山内八郎兵衛（丸屋）宅に設け、書面で各小区の総代・伍長などを呼び集め、また士族を搜索したり、人夫、物資を徴発したりした。

六月七日午前八時、薩軍は、養賢寺で会合を開いて、軍資金、士族従軍などの支援方を要請した。

六月十二日官軍は鏡峠を通過して、床木村（弥生町）へ進駐した。

六月十三日官軍の進撃に驚いた薩軍は、急きよ、参加

した佐伯士族（佐伯新奇隊）四十余人とともに、江良の本営へ退却した。

薩軍に加担した佐伯新奇隊は、各地で転戦したが、このうち、戦死者十一人、降服者七人、無事帰郷者二十二人で、従軍した旧士族のおかげによって、佐伯の町は焼け野原にならずにすんだ。

#### (四) 竹田・臼杵地方

薩軍に協力しない竹田は、民家が焼き打ちされた。

臼杵では、官軍に味方した士族八百名は、臼杵隊を結成して、三千名余りの薩軍に抵抗、ついに四十三名が壮烈な戦死をとげた。

昭和十七年六月、臼杵城跡に、「勤皇臼杵隊之碑」（臼杵隊義戦顕彰会・戦死片切八三郎遺腹中根貞彦撰並びに書）が建立された。

#### まとめ

熊本県田原坂には、陸軍大将・二品大勲位・熾仁親王撰文並びに篆額と、陸軍省六等出仕・従六位勲五等・秋月新太郎書による「崇勲碑」―明治十三年十月―が建立

されている。碑文には、

「我軍殊死して、戦うこと昼夜をおかず、十有七日、遂に之を抜く。死傷四千余人。…未だ、田原坂のはげしきに如くもの有らざるなり」と、記されている。

乃木希典少佐は、この戦いで、軍旗を薩軍に奪われた責任をとって、自決しようとしたと伝えられている。

ことしは、西南戦争から百六十年目に当たる。昨年の九月二十四日（西郷隆盛自刃の日）、鹿児島市南洲神社境内で、新たに見つかった三百二十六人を含む六千七百六十五人の薩軍戦没者の名前を刻んだ「西南之役薩軍戦没者名碑」の除幕式が、執り行なわれた。

鹿児島県内や宮崎、福岡、東京などから、遺族ら約三百人が参列し、雨の中、故人のめい福を祈るとともに、当時をしのんだ。

## 二 久保田南崖の墓

中野火葬場へ通じる市道が、陸軍墓地へと右折する道の分岐点にあたる山裾に、久保田南崖の墓がある。

南崖院釈敬之居士

文徳院釈智園大姉

明治二十三年六月三十日 夫完助 六十一歳

大正 四年四月二十日 妻ワサ 八十六歳

と、南崖夫妻の戒名・死亡年月日などが刻まれている。

さらに、墓碑の前面には、頂上のがった、大きな青石に、熊本県知事・従三位勲三等・松平正直扁額、非職・広島県書記官・従七位・奥井清風撰、熊本県士族・内藤順太郎謹書と彫りこまれた「久保田南崖翁之碑」―明治二十六年九月―が建立されている。

その碑文には（漢文、その一部分）



久保田南崖翁之碑

明治十年西南の役、官軍尾賊豊後に入る。

警視隊長萩原某、君をして戦地の図を作らしむ。

三昼夜にして成る。一山、一川、市街、村落、田圃、森林より以て、兩軍接戦布陣の地に至るまで、細大洩らさず、恰も之を指し、其を掌るが如し。

其の価を問うに、曰く「報告を助くるのみ、何ぞ論ぜんと」と。

政府賞して、金若干を賜い永く警視庁に蔵すと云うと記入されている。

彼は、天保元年（一八三〇）四月十五日、佐伯藩土山崎太右衛門の次男に生まれた。幼名を彦四郎と呼び、のちに完助と改めた。

子どもの頃、父をうしない、兄太四郎（画家・山崎寿山、あるいは文内、文民ともいう）の養育をうけて、十歳するとき、久保田家へ養子入りをした。

兄寿山は、江戸（参勤交代・滞在中）で画家谷文晁、桜間青崖について学んだ。その関係で、師青崖は、弟子寿山をたずねて来佐し、三年間同家に寄留した。このとき、南崖は青崖に師事した。

かくして、南崖は、江戸に出て青崖の門下生となり、

頭角をあらわして「出藍のはまれあり」と称えられた。

嘉永六年参勤交代のため、江戸へ出張し、三年間各派の画法を研究した。さらに長崎、日田に赴き、南画家平野五岳などの大家と交わり、一流画家へと成長した。

## 図書紹介

（史談会取次）

巴の鏡 応永——明応篇 御手洗一而著 一八〇〇円

残部僅少 四冊のみ

巴の鏡 明応——天文篇 御手洗一而著 二二〇〇円

御手洗一族を中心に中世の佐伯水軍と佐伯氏のかかわりを叙述する中世の佐伯地方史でもある。

郷土佐伯の碑文 益田 学者 頒価 二五〇〇円

秋月橘門先生碑、中島子玉・高妻芳洲墓誌銘、靈廟記、敵愾の碑など三十一の碑文を採拓され、苦心に苦心を重ねて解読されたものを古藤田氏が一冊に編集したもの。

原文、訓読、語註、解説と誰にでも理解できるように配慮されている。品切れになると入手は不可能。